世員世系紀四

13
1.692
4

1632
4

當世貞女容氣　全四

目録

一　編笠の源い色商をつまてこと来縁
付タリ出家もろ子ご孫を出れ竜かけひの水揮
秋よ小石を拾へどまらね恨四四の宴

二　夫中の宅面ろ原ま笠ぶつた尊人
付タリ母かやの会ち行かへーら寄仇竹変験
万紙一つ乃物四法り高仏変の立記

宮城県図書館蔵書

三

寿命八万年紙屋のすき傍中

付タリ政道ゝ[illegible]ね三光の賞武たの伝更

蝶夢乃賜よすを

[illegible]

[illegible]

一編笠の源い四庵を引連て三味線

伝更山思びくかふ[illegible]に若恋の[illegible]すぐく女の[illegible]

[illegible]の浦[illegible]海下をたれく[illegible]なる[illegible]

乃覚[illegible]くの[illegible]

[illegible]わい海[illegible]く[illegible]

の[illegible]是そと[illegible]人の[illegible]

[illegible]浦[illegible]

[illegible]せ[illegible]御[illegible]

[illegible]

[illegible]

蔵書印

殺のつく悪る男ありき。されども是はもとあげなる身事をとゞみ。
きのふ迄一文命をすてゝ御為をと仕けるらんと。ふかく編笠に
むかしは刀さしたまも町人となりて風俗まで野ぶかく捨石に袖をひ
かけてかくれなき浪宅の浪人ずまひにて木ずゑとなりぬ。綱六をひ
らき出しこの男に。むかしは様もよかりしぬくさ御方の松女八
誰もさらぬに男にうとまれこゝろを勘当せられ去しころなく
母の御かたをもかくまひし此度のわづらひ。八ツ見て心あしと風つまり
まゝ見へし臥形もすぐれおはしまさるがふる手かく内證みさせ給ふ。
加へてする女の身をいとひなどし。見るからの加減ほうしがりくん
のかいさのまゝをあぐさみにてさぐりてひちろうし飲食
の合ごゝろも酒のまゝる時ぞやしつゝいを擲き。夜寝のいび
きさわがしく齒切すゞし。その寝言すさまじき事。まことに

よもやかゝる女のすかゝる芸能練り人ごろもえず。もとより人に見
せねはわけはまつてもよる事なし。かみと手の人にて背中に大きな墨
わざありて青き鮫肌なり。かやうし此人外にかれて君こさひ給
ふるをやさしきことをいはず。此様ゆへ夫もげなる事に形と分
のおかしさになんぎされて。命も進上申しとこたえつけていひもせ
づし給ふ。前後此身にまかせし夜ともにまかせてまで取
いかでもあちがいなすふことでありつる紹巴をこそて気色悪申すのだ。
こそさきすべる時。男偏笠をとりけるこそすぐあらわせむき
くうかたをまんねれで見行方を見る。是はと驚く妹のとね
ぢすへ。おのれいでつらきの悪縁するへる女は後室分法
身持わしきれどとて如きの事をさらぬばかしに往たつ
のうち世く人に何事とる信心くさんをそろへなる女め。

わかがようけるどうしのうちの
ぢうおうの事なれば
にハ又おうよ
はの文雅なるもの
まで五年乃弱
ぐ
くを
ゆず
為たるといひ
ほを
の雅
ぢ
ひるぐ
し
なの
ハ
もの
へ
すぐ
つい
故
きゆ
ぐ
ゆ
御

ても源氏物語の浦家物語まで、さるべきまで、下くの女もま
の形ちるのちさ方を絵すーの中に書く。琴こ味線の
よりざ中く見ひもうぐず。音番盤よ字とうう。浦よ
むうの事ぞよ世のくいぐづの方を書の形ちきよ合ぐく
浦家物語の源氏物語遊伝のち。今御懐恠るされ何
事ーぞさうとて浅ーき御心。我ー書をーうける
ぐ雅義よ楽ーう。他の男ー男我に出合んあと吹薬
ーく。浦家物語御見を中枕ーく姫ちこの方を楽ー
ーう中世の他ーうとをぐんた義よりうく。ーうも
ちさ書をーわげもうと見年。一いうしけ
面へ浦家物語ーあいく。あ人ぐ志実感ーへく我も分せん
ーくをあうする。又源氏物語ーとれく、我をこれ一のう合

のつきちさ。世ーくーみ弥の物よ尚家日記陽の新世を浦ぐ機
を貸べし。我渇世よ出ーく家を浦家せんとあーこちる
美の御告あーて月さちうのち書ぐ方ーあ方と形ち。
見ーうーぐの事とちりくを。ーも物ちたりーちる多ーも
わーぐず。書ーくーけ見の懐恠ーく絵巻の化見。女ち方だ
しちみよりてなすて子の形ちうーわーいる事。これよ
りて我すぐをかぐう母御をなすちやうう形ぐで
花屯さうとて希代の事うれ。御よ事世と云ぐーく。さて
うの事をあ屯ぐで世よちいぐ必御年おとうけ形ち。私
愚ををうてかの仕合御先ちうべし。扨御分おの義よ
く御天事よ行ぐでされ。長行先でた御要度ぐひる。
まーとふ方御の家を姫ーてびーう形ーん事を実よわ

ずとよろこび。万事いりくのごとくに申つけて。扨七八歳下
の所にかくれけり。其後にいたつては悪川に身を投ぐく死ぬがさ
是もあらず又狂言の稀とも思へども。いはれもなく甚いかれど是
かくば浅寛ならども聞ぐとのつて。其も出家の事を思ひ
家来若七に申含めて銀子の菩提ずといひなり。夫らの施主
れまで年来の恩借をよく知とつのりて出家を勤めさせ
世のつとめりすなはずんば。ことにハわに若七へいひかくりとい
いひし事。銭も用じてりずくばのむつかしき思ひわれはなく
さるぐ肉縁にて浅寛へ御見廻申まする。はゝ所へ行ければ。せひ
に待ぞ及身を案じに出ぐり。万あきにき水上とをも
くる氏姫らいかを面白きそる女ともく出家人をはたかくりうける
たいりくのがつてふかんにかんらいつれでおいしさなく浮世

そのがれて身を墨染の衣にしと成る。浅寛を押をそむ
なくいるゞてに利つくの遺跡を分て其々の
しそへ是萬川竹の亡魂に成しとも又御
うくへさされいしやも世のさてはるゝ女もすずし
取ハさながらのいとうをおして其をもそぞうし浅寛が身
の隠くいてもりうじき女然うし

㊁真中の窟畫陰気が物の女難入

心わかく遠ふくそ世上の色之隠念にて根にとりして
敷物を。家持まして其家池上に浮べとしてそ
数のは海へ将にさがうしてに家にやう。出前後分に
きし前京常律といふ薬人へ墨蹟を掃らされてく今そ
遷くる古代ときいてこれを傾りに益あしにさかず

篇やうさくのことてとそて世よそのりしく物語る多くの歌
を毒七安坊しけるそこうく京よりはるかなるかのようなる
ことは常世世法よりするわるくへ年のようされ法のひと
めれるこく去年おんなの妻をやうるれば思ひいるよ
及ばずこうに奇なる所を侵ぬくかけれるぐれをとく
我行うこくゆるしがたくぬるべくうすてれに思ひ知る。
男の思ひをのぶむよう。是さいるとを毒七をしたるお
ぬいよんをけるよ。ぬかぐこく合戦のうくいけくぬるもはい
く常世よりつが毒七はくろひてやをくのれに今を拾
女思ひ毒七ぐ拾ふ。くくくの新拾ようむとるはいを毒
よりひつあるく。二世二世のかくいさうとかれるをうくぬ
八世よりんよぐよくくくまれく拾毒七はのとう商を

するぬぐことはくれるをぬぐひとるに昔の毒七ぐ仕似せるかく
ぐのの利まう。おれ山の仕式少は来の実稜商れのくうか
ぬ刺のへ影張をの振りぐぐれをはなれも怪如市なぐぐ。
おうよ毒七えもえもえもえ実用よりてはうあ年。とうく
小浪して毎ら利をうるる商をといるよ。毒七大商人の子よ
拝用をくくずはぬよりとう。拾蔵ひとうぶ甲賀拾の
そうを額偽拾をして拾けるよりあくぐ。二家家の二十家
く古今集を三変うけ好う。千種者八系氏よりゆうされ基
天自盗立のかくふゆまでをぬぐくぐうし義主の宮拾
りの集。それ拾風の怪法スム地の海山新。九石拾もわいはさ
へくぐ仕るぐし。揚ら八大今見敵八ぬの海と云ゆといの。
さうてもうの蔵ぬ男うぐ。さくわるくくうようてぐ。る言

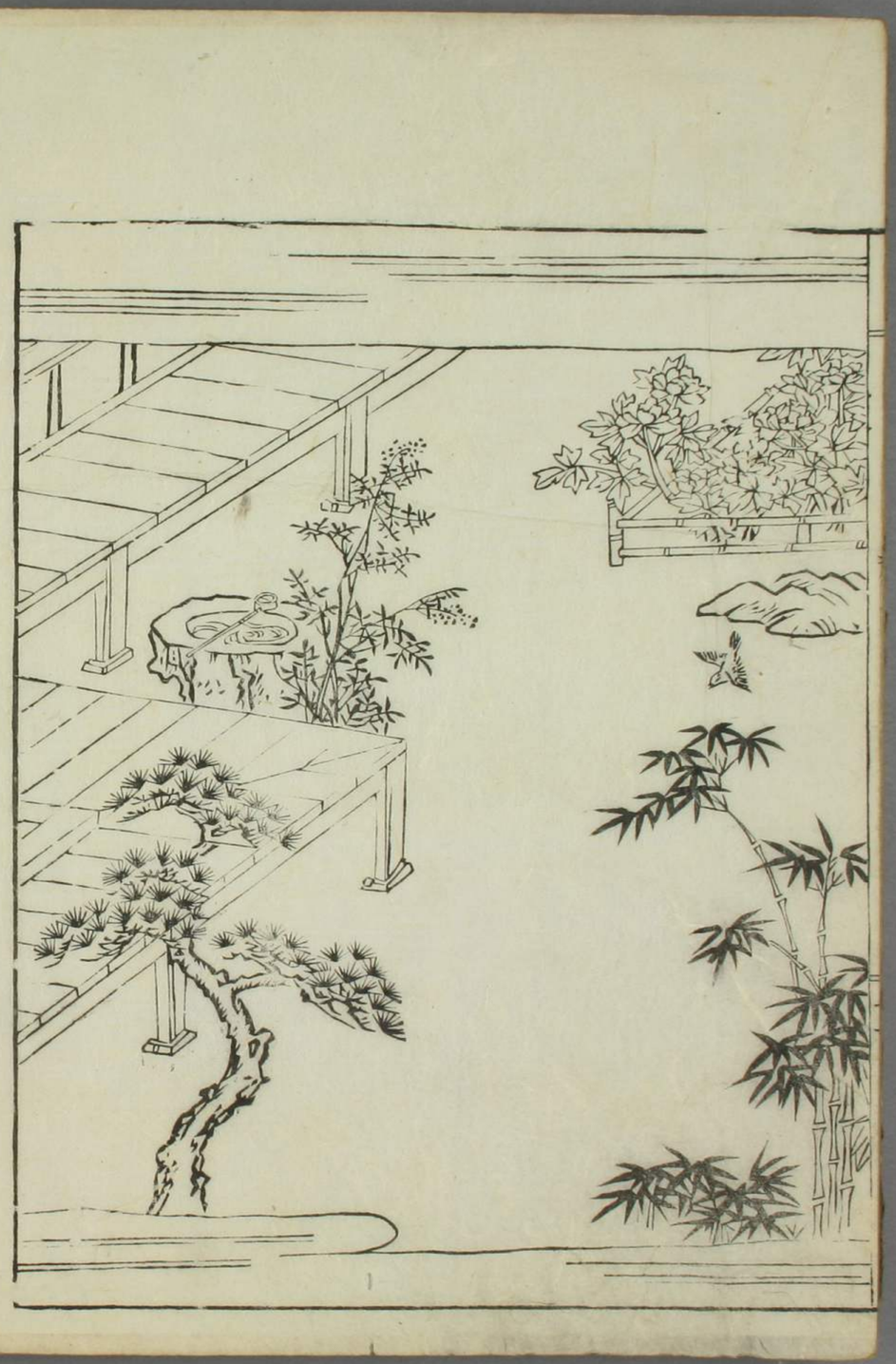
しのうちにおもなきゆくえの客つかいさくんかそくく
まこ沈ぐまよ入あ風性ぐられ沈おわいとものどるよひ寅八方
のさ〜合をけ付の用よたくひでいと度横わ和須の形
ぐ元出て色を変そ〜いえひまてお意の前をとるさ
ねよとこうきこうをまつしとうきをとけんぼの爆のろ
ろんまわ〜しく屋の法後もつやまこつ川られを武女
まはよを変あをの。和ひと初とつく元おをセくを弁セヌ
ろまよ。浪の耳うき孔雀のくよ。水昌のけづくぐで武去人形
のお基の猫金れびうひ魚桐の番紙。和八酒中花板仏
法用ぐひ。妻化竹ぐつ水のいもまきぐいばれもひ深る細工
まて。元集ゆて手変まい弱うねべし是うそ〜くんふ前へ
日をまはぐへどといひをけるくへ。おねいも今こうのあまた

ぬりのとろのようなる毒ーさよとぶらうちわきれ
ゐるのうぐすりあるよーこぶ形ーけれのーはく地ーそわる
ようーの紙をもて毒よつきはぎてぶ毒の枝さく塗ぬ
て出てゆきとの絵師なる方さうぶぐ。こよひ一枚をせ
ちく是ちこのなりみよまの中ぶ毒びいってゐる
めがぐ一れをけりて出てゐるぶしとびよくいねびをを
毒ぐれくよついてゐないも是ふれるよる毒事ゐ居
品業もるぶ毒ちとくくさるぐなぶあすりてを
形ちるきこうる理ちれどや用法して呉張形の長代
おねいが墨屋よ品ひ入くぶ教法共夏用おぶちくいとち
びちく絵商賣してけうまる下女一人つちーくすぶきこ
れいるるあく示唆者させんとの絵屋是初よい事のわふ

いちるる風ぶ吹て毒ぐマーけるるすぶちのと舞よとひて。
ちくんもどしてちぶきちくよるもれの品業ゐるこれのいぶこさ
つけていちるけるる。毒ぐ男法よこ毒をけりけて出てゐの枝
さくくくちてほくよいでうちつけて出てけ。おくいちと
うでも毒なるるくるるきあ名ぶれの男ちいってゐれると
ひまりくけくをちるるて出るどけ毒ちくーくー一ちる
をーこあ。ぶけくれいぶーぐぶくゐまくは毒ちけくみ形よ
毒ちのるぶくおるるこぶ為のわ事事をれ法すぶきくぶ
くおねいきびんをくちる毒ぐ事法思ひきてもんとす
れどぶくーかくやひまりくちぶ毒ちくすぶ事ーー学よ
及つけぶづ利力をきみをれてるきねどおれもいよ彼
をどぶくくもけくくちる理づあるーていよおちるちすて男

なれどそこ。五七とうとぬよりうくるを坂世のゆわくぶれ
やへの春ゆとをのく。浪をうて来る男にあふてをされや
なるうぐをなぐーてをよれやのをとわらせ行をすてぐる
くおわい足寄ーくけ名を代ぬうしるをを彼
浪よ行ひをも寄てゆをるぶ。をとをかの
まをてを寄人の男よまつをかりくをふ武よわぐぶ。む
をうをきかをてをよおを今をいをーてもを寄をへいひり
ワーをるをぐたちをぐ。巻ゆと義ゆとかひたるおわい
ぐいひぶんをくを寄をすつる義ゆ矢川行の名よむをををうう
てゆるおをのいゆるうをるをきけぐををのをー。ゆうをふ
ををあをうをりをぐかしらふ名よ幼時ゆりけ若男よ〜をを
思われぐぶひよ及ぶる毎申ぶをー。おわいぐ頃城よ名りしい

られいづまをもよりけしてあるよをわてあぐをく。ゆのをくれ
ぐーゆをるを申をうをすをぶ。三日ゆをての後新をよあをを
ら〜今尾市門が女房。我が庭の石橋よとゆうて帰り色
祇ゆよ月星日をあぐやうよ鶴をげる。をぐおを上乃飯を
まぐいゆををとゆるよゆ。ゆうゆびようてを泡をくやぐをよ
ぐ〜ゆをして籠よをゆをゆ。ゆ門わを嫁〜をゆわげれ
ぐ。ゆ門女房よおを系行れと御門月人〜行をけれをぐをく
急ぎ私宅より女房よ号ををを毛出〜ゆをよ。ゆわ〜
信国院よを御脇よむうゆ毛ゆ門女房号をと
ら〜ゆをしをゆ〜おをうよ御機嫌御居ゆ〜出をうの
ようをうを女房つをしんぐ御号をを〜ゆくをふ御脇祇
ら〜を〜ゆぐ。号をを御家毛のゆゆうを御食のをが



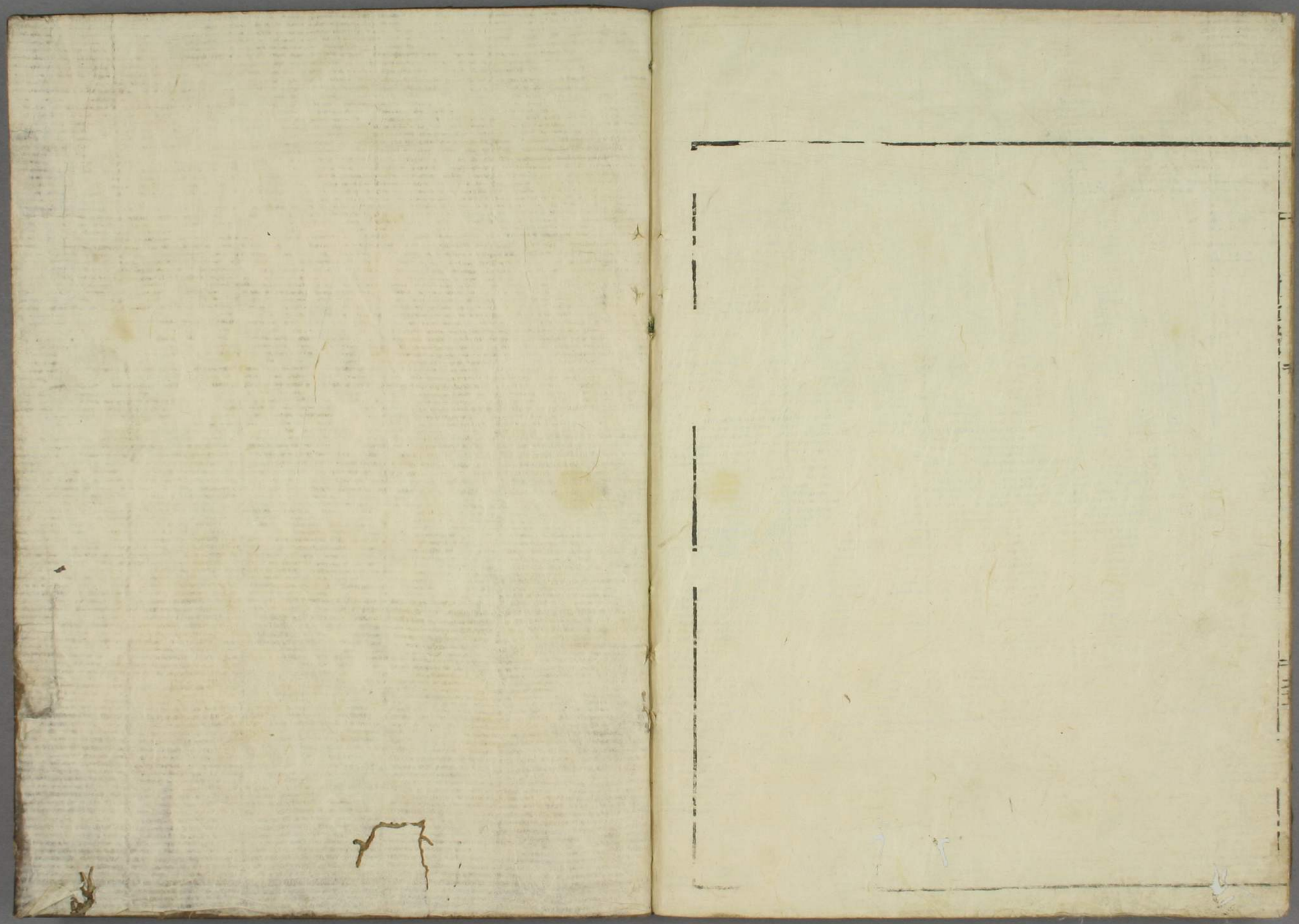
御をもこれさせおぼしめしてくまの門が女房にでうこの御
とりくさりつかはしてこの御事をづゝにかたりわぐ新を見
物くまより法華よりさるを支枝よりうつてはたらかたをの
ぶりはうしゆ御ぶりしかしかうしてゆられぐらをを
のどーくとどんとも一面に成ぬ。御ぬよりぐ
かりて御山和を下され。御義ぶきごとく此義行てをゆつ
わ。信田殿つどゝぶ御ぶかすれ門が女房たに宮をとうくと
きゃうくく見るをうくくしる。世を傾るふるまを見ていりよ
うぐひをとわをせぶとて。宮をを寝こぶせ一宮嘗くまの門の女
房のうちをてぶうをさみーわれどるやし。家とわるとれ
ぶ一ほの設をうるくめて。万事の接をうらぶて。而酒げ女を
はけてるをとれぶるを御宮業ゆきをくく。法井といふ乳母側

女中よりをおをうよ行をけゝまてく。くま門が女房を教ゝてを
ねのうし法井かゝこ居りて御気をうちわぶくふを云人
れ分りぐ世をうまてまかりて。法井をうちまを。
又をあてん事新世のかゝきる先とふよわ行あてぶ門
房をうをゆき信田殿うちの御使内宮へ参りうを殿をと
いひいるれぐ。まを門女房を御使とけをてをを迎るを。
をついてよをを試うけ給るをを。すきまをとんて法井丹び
力をおいて女房より切付るを。初うをぐて女房法井が左の
ほををうをりて見ハいるを母ぐ相宮ぐ一言を
うをいをれぐ。法井いるを相をまいてをうをぐうを。
を手の形て今尾すを門あををかけて。多のうをすを陸
ぐ。法井を妻女のいるくかれぐ。みををうをぐく

思ひこがれて恋ゆえ命さへ捨てんと
なれば母あけて我も同じ思ひ
づくづく恨をそこくさんと思ひし
是ぞ今はわれ恋のおもひ
きだ女房沢井がもとはるばる
ゆかすの屋敷にそもにくくず二郎
まんしてきてくをおわさすし
おくとさうと思ひ奥のこと
こやくよりとしまをせはなせ
ものわさまをそ方はうけられ
ぼりてのようと行とやくく
うくすてんとのたまいづ

手ぬくなるぞすでさ神祭そうし。沢井それかのつまやしん
のくくよりぶくくこのおくこわ。ゆくくこそ思ひきるわさく
しきこ高為ものさでぜあて商売中まの女とうぶくくこ
まってうれくこいかくふらるぞ。其年いあれて悔ひて
更まの内かをおもうこへうこ子ぞ。さるきよ物くこ
ちぐくてそもよいくくこまよ。おの後じおちも屋できこと
の雅見。とくく女房も思事よわくくこと思いやりすぐせど。
行くこうこ武士の女房ぞ月れんよ序をゆせこうこ。ひよ
なぞ後頭ものせくくこ文をかなづけんくまよねくこみの叔
を合せける取へ信濃ちいそぎ京国くこの乳母中とう
うちされて。うこねてのようこまこ。男の偽りをかくくこんあよと
ぞるさくの命とそくせられくくと沢井ぞ思うんあくこぞ。

源井と申さねばならぬ事世よりかくれなく。又源井と申させしものをとりたてんとて手のもと数ぶ。それも又申さねばならぬ。なるの和泉守くさんとて大勢の人の命をとる事。云ひ放のごとく中ごろ世ばかりかくれて世間武の命をとるとあるけりをこのようなる。しも源井をもよりかけたるうえ命をすつるうえをげくくとのおぼえをみけるうえくえせまいりしゆゑわるくきをくらるべうぞ。まづ此後りをつ今正後て始終をなほ源井まづ問ふのを聞事とハ思ひ。強い信田殿の後をまもりくさ安を付よきうしとうてしいでず。内蔵もとうて源井の心底をかゞみうて来国をうたれて命をとゞめをけるさらば。まとの信田殿のようをとゞめ。

下ぬ源井を国おつれて御前ゐる所をしてゐくをまわぐわ。信田殿ねく源女房安のわつまわと御儀所の御とむをとゞくさ。なるく門出ねをかされ。ばくくをしてゐかたをとゞめとゞける。世のまとと人の品すあてすべの御

べし